

資本主義社会における矛盾のひとつのあらわれ

— 真実と虚偽 —

阿 部 矢 二

一 資本制生産様式と人間的福祉の関係

資本は一瞬もその価値の増殖をやめることはできない。資本の存在の仕方は「利得することの休まない運動」である。貨幣の数量として現わされるかぎり、価値は一般的な、抽象的な「富」を意味するとしても、それは具体的内容—価値の担い手たる現実の商品、その使用価値—をもたない数学的な「数」である。こうした無内容的価値の増殖を唯一の推進的動機としているからこそ、資本は富裕それ自体への近接というような、何処まで行ってもけつして到達されることのない窮極の・無窮の・目的を追うよう宿命づけられているのである。

「使用価値はけつして、資本家の直接的目的として取扱われるべきではない。また、個々の利得もそう取扱われるべきでなく、利得することの休まない運動のみがそう取扱われるべきである。」^(一)

資本のこのような本質が人格化されたものとしての資本家は、自分の取扱う商品の使用価値については無関心

であり、無差別・無選択的—indifferent—である。資本家にとつての商品は、人間的労働がそれに対象化されたものでありさえすれば、どんなものでもいい、その種類や品質—商品の使用価値—は問うところではない。要するに価値の増殖、金儲けになりさえすればいいというわけだ。だから、資本家は人命を救うに役立つペニシリンにたいしても、大量殺人に特効のある原子爆弾にたいしても、同様に無関心な無差別な態度をとる。価値をもたらすという点で、二つの商品は無差別だ。それらの商品の使用の結果が、人の生命を救うことになるか、破壊させることになるかは、彼らの関知するところではない。資本は人間の福祉にとつては無縁の存在であり、資本家は、金銭ごとと人情沙汰とは別物だ、という箴言で呪縛されている。商品のうちにふくまれる対立—交換価値と使用価値との対立—は一般的には資本家の利得と人民の福祉との対立・矛盾となつて現れる。

資本が人間的福祉にたいして無感覚だということに規定されて、資本家階級のもの、理解もまたその階級的立場に制約されることをまぬがれない。端的にいえば、彼らは金儲けに關連した以外のことについては、無関心であるばかりでなくそれを理解する能力を欠いている。貨幣で買えないものの存在、貨幣的利得を受容れないものの存在は、資本家の理解能力を越えた存在である。だから、世界におけるかかるものの存在を憎み、できることならそれを力で抹殺しようとする。

たとえば、中国解放のための闘争に、何百万もの人民が生命を惜しまず参加した事実をまのあたり見ながら、ブルジョアジーは革命にたいする人民のかかる自発的情熱と献身とを理解することができなかった。一九三〇—二七年頃の紅軍についての蔣介石ならびに資本主義国の報道の無理解さを、スメドレー (Agnes Smedley) は次のように記している。

「政府側(国民政府)の諸新聞は、朱徳將軍のことを「紅匪の頭目」、「共匪」、人殺し、盜賊、放火犯、などさまざまの名で呼び、それが国内の外字新聞や国外の諸新聞にこだましていったのである。

しかし彼らは、それではどうして、何百万の正直で勤勉な農民や労働者や理想に燃える学生や知識人たちが、彼が推進する主義のためには、よろこんで戦い、死んだか、ということの説明しようと試みたことなどは、一度もなかったのである。^(二)」

ブルジョアジーは、彼らの階級にぞくさない人びとが、どうして金銭以外の何かのために働き、闘い、中傷と死に立向うのか、けつしてわからない。彼らは彼らの自由のうちに抱きこめないものを、そうじて理解しない、そしてそれらの存在は概して気狂か狂信のようにしか思われない。これに反して、大多数の人民の側に立つと、アジア大陸の大半にわたる地域で五億にあまる人びとが、外国の帝国主義の支配と利益からは独立に、自分たちの力で、自分たちの創意で、つくりあげた新しい人民民主主義の国家を、国家として認識し承認できないといふような、そんな認識は、どうしても正常な頭腦の持主のする認識とは思われないのである。

狂った認識は、彼らの階級的土台の腐朽をそのまま反映したものだから不治の症状である。だから、たとえば中国の「解放」ということについても次ぎのような喰いちがい生じる。

中国の人民が内外の封建的・帝国主義的支配と搾取から自身を解放して、新民主主義体制の中華人民共和国をうちたてたのち、世界最大資本の利益を代表するものは、彼らの立場から人民中国を「解放」するまでは、その良心はやすまらないと呼号し続けた。この場合、同じ「解放」という言葉に盛られた意味が、人民の立場からのものと資本家の立場からのものとは、完全に対蹠的にちがう。資本の欲し且つ理解しうるかぎりでの「解放」

は、中国の人民を資本家、地主の前に、その支配と搾取の対象としてふたたび自由に「開放」しろという意味の解放(？)にほかならない。このかいほうのために、資本は力づくで人民の自由を圧殺することをばからぬといふのである。その最近の実例はハンガリーの反革命暴動において見られる。

解放という言葉に与える意味の相違は、社会におけるブルジョアジーとプロレタリアートとの階級的立場の相違、対立をそのまま反映したものである。このような両者の見解の相違、喰いちがいは、単に二三の言葉や概念について現れるのみではない、それは社会の政治、経済、文化などあらゆる事象についてもほとんど例外なく現れる。社会的事象全般に関する見方の相違は、とりもなおさず、二つの社会階級がその上に立つ経済的土台を異にし、したがって異なる土台を反映した哲学・世界観も当然根本的にちがうというふうに、つまり唯物論的に説明されるべきものである。

そこで、人びとは自分の生活を正しい軌道にのせ、誤りのない目標にむかつて前進しようと欲するならば、まず、社会における階級対立の事実を正視し、階級社会の矛盾のあらわれであり、そのうちに矛盾解決の条件をととのえているところの階級闘争の理論を、しっかりとつかまえないければならない。この認識とこの理論なしで、現在を有意義に生きぬこうとしても、それは全く不可能であろう。「鋼はいかに鍛えられたか」の著者ニコライ・アレクセーエヴィチ・オストロフスキイは、その作品を次ぎのような「真のヒューマニズム、社会主義的ヒューマニズム」で貫いている。

「人間にあって一番大切なもの——それは生命だ。それは人間に一度だけあたえられる、そして、それを生きるのは、あてもなく生きてきた年月だったと胸をいためることのないように生きねばならぬ、卑しい、くだらな

い過去だったという恥に身を焼くことのないように生き通さねばならぬ。

そして、死にのぞんで全生涯が、またいつさいの力が世界で最も美しいこと——つまり、人類解放のための闘争にささげられたといい切ることができるよう生きねばならぬ。」（一九四七年版、第二部第三章、二二〇頁）^(三)

人類解放の真実の意味は、人類を階級から解放するということである。政治的に支配し、経済的に搾取する階級と、その支配のもとに隷属搾取される階級とに分裂している社会の階級構造を一掃して、すべての人びとを階級的なあらゆる関係から自由にする、それがほんとの解放だ。現在歴史によって人類の前につきつけられ、その解決を迫られている課題、それがこの「人類解放」であり、その否定的な面が資本主義の腐朽や危機となつて現れている。この課題を成功的に遂行している国ぐにと、未だ遂行するにいたらない国ぐにとについて、それぞれの経済的基本法則をくらべてみると誰にでもわかるような本質的な相違があきらかに見られる。

資本主義社会——資本制的生産様式が支配的に行われる諸社会、商品の使用価値がネグレクトされて価値の考慮が優先するような生産が支配的に行われる諸社会——の基本的経済法則は、スターリンによって次ぎのように定式化された。

「現代資本主義の基本的経済法則の主要特徴と要求はだいたつぎのように入えるだろう。

すなわちその国の大多数の住民を搾取し、零落させ、貧困にし、次に他の国々、とくに後進国諸民族を隷属させ系統的に掠奪し、さいごに最高の利潤をあげるため戦争と国民経済の軍事化という方法によって最大限の資本家的利潤を保証することである。」^(四)

最大限の資本家的利潤の取得を、独占資本の価値増殖欲、「利得することの休まない運動」が、資本家に強要す

る。この資本の強要にあつて資本家は人間の心情を喪失する、だからこそ、大多数の住民にとつてのあらゆる不幸と災害―貧困・奴隸化・戦争・死―が平気で看過されるのである。ブルジョアジーが棄てたところの人間性、人生的福祉への関心を拾ひ上げ、それを全面的に發展させる歴史的使命を背負うものはプロレタリアート以外にはない。ブルジョアジーは自己にかわるべきより、よき後継者・プロレタリアートを鍛え育成しつつ世界から去りつつある。

一九五六年十二月二十日から二十四日までの五日間ひらかれたソヴェト同盟共産党中央委員会総会は、その採択した決定のうちで、資本主義世界の現状と矛盾について次ぎのように述べている。

「資本主義世界においては各国間、各独占資本間の競争がますます深刻化し、拡大の一途をたどっている。独占資本は最大限利潤を追求するため、労働者、農民にたいする搾取を強化し、勤労大衆の生活水準にたいし攻撃をおこなっている。

植民地主義国家はその帝国主義的膨脹政策によつて新しい投資圏を探しとめ、経済的に發展のおくれている国を奴隸化することによつて資本主義的搾取圏の拡張に努めている。しかしながら、これらの帝国主義的拡張政策は不可避免的に後進諸国民の抵抗をよびおこす。すべてこれらのことは必然的に資本主義経済の軍事化、軍拡競争および資本主義制度の内部的矛盾の激化をもたらす。^(五)」

右のような資本主義の社会体制にたいして、社会主義のもとでは生産の社会的性格に照応した生産手段の社会的所有が実現され、その結果労働の生産物は資本家的利潤を生むための手段ではなくなつて、人民のたえずたかまりゆく諸需用を満たすため資料―有用物―となつている。生産手段とそれによつて作られる生産物から資本と

しての性格が失われて、人生的・福祉的性格がよみがえらされたのである。社会主義の基本的経済法則の本質的特徴と要求とをスターリンは、次ぎのように要約して述べた。それは、「社会全体のたえずたかまりゆく物質的、文化的需要を高度な技術にもとずく社会主義的生産の不断の発展、改善によって最大限にすたすことを保証することである。」^(六)

社会主義が他の社会制度とくらべて格段に優れた社会制度だということは、絶えず急テンポで発展しつつあるその国の生産と、その発展につれて高まりつつある人民の生活水準、この二つの点を取りあげただけでも十分にわかる筈だ。さきに掲げたソヴェト同盟共産党中央委員会総会の決定は、ソヴェト同盟に関して次ぎのように述べてゐる。

「ソヴェト同盟の社会主義制度はすべてこれらの欠かぬや矛盾から解放されている。――前掲、ソ同盟共産党中央委員会総会の決定参照――ソヴェト同盟は全社会主義国間の団結のためにたたかい、かつその友好的な協力関係を発展させながら確信をもつてレーニン主義的路線を前進している。ソヴェト国民は共産党によって定められた計画を生活上に具現化するため全力をささげている。ソヴェト国民はソヴェト国家が諸国民の利益と世界平和の偉大な事業を一貫して擁護していることを知っている。

現在わが国には、共産主義建設の現段階に適應した高度な経済発展段階に移行するため必要なすべての条件がそろつてゐる。」^(七)

社会主義の出現が、人類史の上で飛躍的な進歩を画するものだということは、今では、言葉や文章などによつては打ち消すことのできない客観的事実である。それは、ソヴェト同盟が前進しつつある姿によつて、また、ソ

ソヴェト同盟の前進しつつある姿にたいする恐怖の表現—反共カンパニアの狂暴化—によっても実証されている。一九五六年一月二十九日付人民日報所載の論文「ふたたびプロレタリアート独裁にかんする歴史的经验について」のうちには、ソヴェト同盟について、その社会制度としての優れた点に關する次ぎのような記述がある。

「ソ同盟は革命後三十九年間ひじょうに多くの成功をおさめた。ソ同盟は搾取制度を消滅させることによって、経済生活の中にある無政府性、恐慌、失業に終止符をうった。

ソヴェトの経済と文化は資本主義国では考えられない早さで前進した。一九五六年のソヴェトの工業生産高は、革命前の最高をしめした一九一三年の三十倍にあたる。革命前には工業発展がおくれ、文盲が多数をしめていた国が、いまでは世界第二の大工業国となり、いかなる面からみてもすすんだ科学と技術の力をもち、高度に発展した社会主義文化をもっている。

革命前には抑圧されていたソ同盟の勤労者は自分たちの国の主人となり、革命的闘争と建設に偉大な情熱と創造性を發揮し、その物質的生活と文化的生活は根本的な変化をとげた。また十月革命いぜんにはロシアは諸国民の牢獄であつたが、革命後これらの国民はソ同盟内で平等をかちとり、急速に先進的な社会主義の国民に発展した。……これらは、人民がずっと以前から知っている争う余地のない事実である。」^(ル)

より、よくなりつつあるもの、前へ進みつつあるものが、ふたたび逆転してより、悪い方へ、うしろむきに後退するようなことを、人類史はかつて経験しなかつた。歴史の歩む道は不断の前進、不断の進歩の方向を指している。老朽して時代おくれになつたものに、新しく生れて伸びてゆくものが交替する、これが永久に滅びないで發展する生命・生活・歴史の法則である。

註(一) 長谷部文雄訳「資本論」第一部 二九三頁

(二) A・スメドレー・阿部知二訳「偉大なる道」——朱徳の生涯とその時代—— 二頁

(三) オストロフスキイ・杉本良吉訳「鋼鉄はいかに鍛えられたか」第一部・ナウカ社版 三六五頁

右の書とあわせてヴェ・ボレヴオーイ「真実の人間の物語」上、下、(青銅社版)を読むことをすすめた。

階級対立の事実の認識について。

「さいきんの国際問題を検討するばあい、われわれはなによりもまず、もつとも基本的な事実、すなわち世界における帝国主義侵略プロックと人民勢力の対立から出発しなければならぬ。

帝国主義の侵略によるくるしみを十分に味ってきた中国人民は、帝国主義がつねにすべての人民の解放に反対、あらゆる被抑圧国民の独立に反対してきたことを忘れることはできない。また、帝国主義は人民の利益をもつとも勇敢にまもっている共産主義運動をつねに自分たちの肉の中にあるトゲとみなしてきた。最初の社会主義国家であるソヴィエト同盟が生れて以来、帝国主義者はあらゆる手段を使つてこれを破かししようとしてきた。」(アカハタ・一九五六年十二月三十日号「ふたたびプロレタリアート独裁にかんする歴史的経験について」)

「世界に搾取者と被搾取者がいるかぎり、また権力をもつ資本家と労働者階級とがあるかぎり、歴史的諸事件を分析する出発点はブルジョアジーとプロレタリアートの対立である。これまでに修正主義者は何度もこのマルクス主義の羅針盤——事態の発展の方向を正しく見さだめるための羅針盤——を労働者階級の手から奪いとろうとしたものだった。」(アカハタ・一九五六年十二月二十一日号「このことで利益を得るのは誰か」プラウダ紙論文)

(四)(六) スターリン「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」五月書房版・上・五三―五五頁

J. Stalin, "Economic Problems of Socialism in the U. S. S. R." p. 45. Published in Moscow 1952.

(五)(七)「アカハタ」一九五六年一月二七日刊第二一六〇号「二つの決定を採択」

(八)「アカハタ」一九五六年一月三〇日刊第二一六三号

二 資本家的利害と科学的真実

資本主義社会では、社会的生産が資本家の私的企業にゆだねられているので、この社会の物質的・精神的生活をささえるところのすべての財貨は、資本家の財産として、資本家の手に握られることになる。かくて、資本家はこの社会のすべての人々の生活の根を押えているという意味で、資本主義社会の主権者であり、何人によつてもその意思を拘束されることのない自由な人格・独裁者である。資本家の自由・独裁は人間の労働力をもふくむあらゆるものの商品化、したがって、資本の生活様式・G—W—Gが人類の社会生活の全面をおおうにいたつてその絶頂に達する。貨幣はすべてのものを買うこと、自由にすることを要求してやまない。

それだから、「絶対的に何らの商品でもないもの、たとえば良心・名誉などは、その所有者により貨幣で売られ、かくして、その価格を通して商品形態を受取ることができる。」⁽¹⁾ というような事態が普通あたりまえのことになる。資本はすべてのものを金儲けの目的で買うのだから、買われたものはこの目的のみあてられる。それで、買われたところの良心・名誉などは、当然資本の金儲けのために仕えるという特殊な商品形態をとらされた良心・名誉などとならざるをえないのである。

このような事情は学問や政治の關係においても少しもかわらない。いろいろな学説にしても政治上の意見や政策にしても、資本はそれらが自己の金儲け目的に役立つかぎりで買う—つまり奨励したり、保護したり、援助したりする。この場合、学者や政治家が自分の学者、政治家としての良心や節操を資本に売り渡したことを意識しているか、否かは問うところではない。彼らが意識して、資本とは利害を異にする社会階級の立場に立っていないかぎり、結果として、客觀的事実として、彼らの言動が資本の利益を守り援けるといふことになるのである。

反面において、資本は金儲けにとって不都合なこと、妨げになるようなことにたいしてはがまんできない、それらを憎み、それらを排除し抹殺するためには、どんな手段でも採ることを敢て躊躇しない。資本の利益に奉仕することから自身を自由にするためには、人びとは資本の猛烈な妨害や攻撃に耐え対抗しつづけるに足りるだけのかたい操守と不動の階級的認識を身につけねばならない。資本の支配する社会で、眞実の科学的研究がどんなに烈しい敵意を巻き起したか、マルクスは「資本論」第一版への序言のうちで次ぎのように述べている。

「経済学の領域では、自由な科学的研究は、他のすべての領域におけると同じ敵に会おうばかりではない。経済学の扱う材料の独自の本性は、人心の最も烈しく最も狭量で最も厭わしい情念を、私的利害からの忿怒を、自由な科学的研究に対する戦いと呼びだす。たとえば、イギリスの高教会は、その貨幣収入の三十九分の一にたいする攻撃よりも、むしろ、その三十九の信仰箇条のうちの三十八にたいする攻撃の方を赦すのである。今日では無神論そのものは、伝来の所有諸關係の批判にくらべれば軽い罪である。」^(三)

科学としての経済学は資本主義社会を分析解剖し、その矛盾の發見を通じて、この社会の運動法則をあばき出すことを窮極の任務としている。この社会における「私的利害」の背反は、その大きな矛盾の根源なのだが、こ

の矛盾を突くことは、この矛盾の存在している現状によつて最大の利益を享受しているものの忿怒を激発する結果とならざるをえない。というのは、資本主義社会の運動法則はブルジョアジーの私利の揚棄を客観的な必然として定立したものである。

支配し搾取する階級は、その支配と搾取の現状における私利の妨害に妨げられ、自己の利益の終滅を立証する客観的法則を容認することができない。この客観的法則を認めえないというその点で、ブルジョアは自らその階級的存在の不合理性・反動性を暴露している。彼らの階級的存在が進歩的意義を失いつつ反動化して行くにつれ、彼らの全力は歴史の歯車を逆転させることに、すなわち、彼らの階級的存在を自ら否定することに、集注されざるをえないような破目におちいる。

というのは、支配・搾取階級は、社会の運動法則の科学性を否認することによつて、資本主義社会におけるすべてのものの観方についての科学性を放棄し、自らの社会的支配と指導の合法則性を喪失するからである。亡びるものは亡びるための条件を自らつくりつつ亡んでゆく。ブルジョアジーが、真実を、科学を、おそれ、忌避することは結局、その進路を示す羅針盤を自ら破壊して、自らの難破を、自ら招来するにひとしい。ブルジョアジーは自分の墓穴を自分の手で掘る。これが資本主義社会の運動法則の合法則性が自らを貫徹する様式である。

真実をおそれるブルジョアジーの真実にたいする態度にたいして、真実を求め、真実に従い、自己の行動を客観的法則によつて規定することに利益をもつもの、プロレタリアートの立場に立つもの、の真実にたいする態度は、次ぎのようによくつきり対照される。

「搾取階級に奉仕し、政権についている政党あるいは政治団体で、自分たちの党員大衆をまえにし、人民大衆

をまねにして、自己の大きな誤りを真剣にあげだすことを敢てしたものは、いままでの歴史にもなかったし、現在のどんな資本主義国にも、ひとつもない。

ところが、労働者階級の政党は、それとはまったく異なっている。労働者階級の政党は、広はんな人民大衆に奉仕する政党であつて、このような政党にとつては、自己批判をおこなうことによつて、誤りを失うほか、なにひとつ失うものとはなく、得るものはかえつて、広はんな人民大衆の支持である。^(三)

人民大衆に奉仕する政党が大衆の前で公然と行なう自己批判についても、資本家階級に属するものはそれをたんに敵側の誤りや欠陥の暴露として、一面的で、消極的にしか理解できない。自己批判の積極的な意味、「溝におちればそれだけ利巧になる」というように世俗的表現をとつたところの真理、を理解する力さえ彼らにはない。真理についてのわれわれの認識は、誤りと失敗を含む実践によつてのみより深く、より正しくなつてゆく、誤りと失敗の自己批判は、誤りと失敗のより、少ない実践をかちとるためにとる不可欠な手段である。この手段を思い切つてとることのできるものだけが社会の客観的法則の科学的必然性をかたくつかむことができ、したがつて社会を前へ推し進めるための進歩的役割を誤りなく果たすことができるのである。絶えず大胆に自己批判することによつて、「誤りを失い」、いよいよ増大する人民大衆の支持をえつつあるところの人民勢力は、自由諸国の支配階級のあびせかけるところのあらゆる「嘲笑」と侮蔑とデマ宣伝とにかかわりなく、かえつて、嘲笑者のあだねがいをあざ笑うが如く、打消しがたい事実としてその威信と力を加えつつある。——最後に笑うものが最もよく笑うものだ。

「世界のあらゆる反動勢力は、この出来事をあざけり笑つている。彼らは、われわれの陣営が自己の誤りを克

服するのをあざけり笑っているのである。こうした嘲笑からはどんな結果が生じるであろうか？

その結果として、彼らの目のまえに、これまでよりもいっそう強大な、永久にうち破ることのできない、ソ同盟を先頭とする平和と社会主義の偉大な陣営がたちだかり、そしてあざけり笑うもの入食い事業の方がかえってにはなはだ芳しくないことになるのは疑いのないところである。」^(四)

マルクスの学説は現在にいたるまで、数知れぬまで論破され否定されてきている。それらの論破は世界的な權威をもつ学者によってなされたものだといつても、「世界的」が「ブルジョア的」であるかぎりには、本質において、——非科学的だという点——凡俗の政治屋どもの社会主義にたいしてあびせる漫罵、嘲笑とほとんど選ぶところのない「論破」である。

それについて、一つの例として「今や彼は国際政治学者として、世界的な権威者である。」^(五)といわれるカー(Edward Hallett Carr)の著書をあげることができる。その書名は邦訳では単に「カール・マルクス」だが原本では「Karl Marx A Study in Fanaticism」である。この書名「ファナチズムの研究」がすでに明らかに彼のマルクス主義についての理解(?)を暴露している通り、彼は「マルクス主義者は盲目的な熱狂者」^(六)だと書いておる。最も科学的であるところのマルクス主義をつらぬく合理性を、その反対物・ファナチズムとしてしかとらええない彼の頭脳こそは、彼の属する階級の利害だけを最もはつきり映し出すことのできる階級的被造物だということを証明している。不合理性の上に立つ階級は、その土台に照応してその要求に奉仕する頭脳を必然につくりだす。

このような頭脳の一つ、カーにとつては、マルクスの完成した労働価値説は「一種の信仰としては信じ得られ

ても、論理によつては証明することも否認することもできない。^(七)」だから「資本論はもはや一つの議論ではなくなった。それは護符であつた。」^(八)資本論に、それは偶像崇拜者の「おふだ」という判決を下して、資本論を論破したつもりの方者の眩想にはかかわりなく、資本論は、その原理のつくりあげたものの実在——社会主義国の実在——によつて、何人によつても論破されないことを実証しつつある。

眩想の上に立つものは、自らの錯覚のために、その眩想を意識することができない。そこにブルジョアジーにとつての悲哀があり、歴史の法則の必然がある。「ブルジョアのうしろにはプロレタリアが立っている。」だが、ブルジョアはプロレタリアを、自己の後継者を認めえないのである。

——一九五七・一・九・松ヶ崎の寓居にて——

註(一) 前出「資本論」 二二八頁

(二) 右同書 七三頁

「いまや問題なのは、もはや、この定理が正しいかあの定理が正しいかということではなくて、それが資本にとつて有益か有害か、好都合か不都合かということ、警察の忌諱にふれるか否かということであつた。私心のない研究の代りに欲得づくの論難攻撃が現われ、とらわれない科学的研究の代りに心やましく意図あしき論弁が現われた。」(「資本論」第二版への後書・同書七九頁)

(三) 「人民中国」第七号付録『プロレタリアートの独裁の歴史的経験について』——この文章は「人民日報」編集部が、中国共産党中央委員会政治局拡大会議の討議にもとづいて書いたもので一九五六年四月五日づけの同紙に掲載された——三頁

- (四) 右同書 一〇頁
- (五) カール著・石上良平訳「カール・マルクス」 四二〇頁
- (六) 右同書 七頁
- (七) 右同書 三六四頁
- (八) 右同書 三八〇頁

資本主義社会における矛盾のひとつのあらわれ(阿部)